研究者総覧：秋田　喜美 (AKITA, Kimi)

氏名	秋田　喜美 (AKITA, Kimi)	
職名	准教授	
所属講座	日本言語文化専攻応用言語学講座	
学位（専攻分野）	博士（学術）・神戸大学	
メールアドレス	akita@lang.nagoya-u.ac.jp	
ホームページ	https://sites.google.com/site/akitambo/jpn	
研究分野	オノマトペ・音象徴	
	認知・機能言語学	
	言語における類像性	
主要著書・論文	"A constructional account of the 'optional' quotative marking on Japanese mimetics," *Journal of Linguistics*, 2015. (共著)	
	"Toward a frame-semantic definition of sound-symbolic words: A collocational analysis of Japanese mimetics," *Cognitive Linguistics* 23(1), 2012.	
	"An embodied semantic analysis of psychological mimetics in Japanese," *Linguistics* 48(6), 2010.	
自己紹介文	大阪大学での 3 年半を経て、2015 年春より応用言語学講座の一員となりました。愛知県尾張旭市出身です。好きなものはうどんで、年間 700 杯は食べます。 主たる研究テーマは、オノマトペ（擬音・擬態語）の形式と意味です。「オノマトペ」というと、面白いけれど掴み所のない題材と思われがちで、実際、未だよい「掴み所」が見つからず、印象論が繰り返されている局面もいくつかあります。一方で、私の興味の中心は、あくまで言語学的・心理学的に検証可能な、言語記号としてのオノマトペの特性です。 例えば、オノマトペは「音の絵」とも喩えられ、事象を全体的に「まるっ」と写し取るとされます。一例を挙げると、「とぼとぼ」というオノマトペは、弱々しく遅い足取りに加えて、歩いている人物に元気がないこと、肩を落としている様子、そもそも歩いているのが人間であることなどを伝えます。これらの詳細情報は、「弱々しく」「遅く」「気落ちして」といった個別の副詞的表現では覆い尽くせないようです。一見印象論的な「音の絵」仮説は、このようにオノマトペの「意味指定の複雑性」として、意味論の対象となり得る題材です。最近は、ちょうどこうした課題に、フレーム意味論や構文文法という枠組み、そして言語間比較・コーパス調査・実験・分野間連携といった手法から、楽しくアプローチしています。	

受験生へのメッセージ	専攻名は日本言語文化ではありますが、言語学の対象は日本語には限りません。ぜひいろんな言語のいろんな現象に興味を持ち、その上で日本語を見つめてみましょう。 枠組みとしては、認知言語学についてお話しすることが多くなるかと思いますが、これに関しても、他の枠組みについてもいくらか学みながら知見を深めていかれることを望みます。 自己紹介文でオノマトペに関する印象論の存在に触れましたが、認知言語学についてもよく似た話ができます。認知言語学の入門書をめくると、面白い例文や図がちりばめられており、直感に訴えかけてくる分、とっつきやすいと感じる方が多いのではないでしょうか。ところが、実際には、「認知言語学＝印象論・直感論」という認識でいると、やがて壁にぶつかります。 言語研究を進める上で、直感ないしインスピレーションは重要な機動力ですが、それを学術的に有意義で面白い研究へと育て上げるためには、基本的な仮説設定の方法と検証の手順を押さえておく必要があります。授業だけでなく日頃の雑談から、そうした方法論を皆さんと学んでいけたらと思います。 （授業風景）